

「橋の日」の思い

大田原 宣治¹⁾

1. はじめに

8月4日の語呂合わせで、皆さんは何を思いつくでしょうか。「箸の日」、「橋の日」、中には「パチスロの日：パチ（8）と中国語のスー（4）の組み合わせ」などもあるようですが、本誌を読まれている皆さんはやはり「橋」ではないでしょうか。

今回、本稿の執筆依頼を受け、橋梁・鋼構造物の専門家でもない、まして塗装技術となるとますますわからないとお断りしようかと思ったのですが、事務局の専門にはこだわらないという温かい言葉に甘え、安心して「橋の日」について寄稿することとしました。

ここでは私の「橋とのかかわり」、宮崎「橋の日」の歴史、活動等について紹介します。

2. 橋とのかかわり

私は昭和53年4月に宮崎県に土木職として入庁し、多くの地方公務員技術者と同じようにダム、道路、河川、災害等、幅広く経験をさせていただきました。その中で、特に思い出に残る橋梁との出会いは、平成4年4月から担当となりました宮崎県北方町（現在延岡市）の国道218号椎畑バイパス工事（L=7.8Km）の中の干支大橋（L=385m、鋼中路式プレストリブ固定アーチ橋）です。（写真-1、図-1）

このバイパスは構造物が多く、橋梁が6橋（総延長1,252.5m）、トンネルが3箇所（総延長907m）あり、

開通式が決まっている中、干支大橋は塗装面積が30,000㎡以上あるため、一番のクリティカルとなり、工期短縮が大きな課題でした。苦肉の策として、当時はメタル橋の場合、工場で橋梁製作会社による下塗り、中塗り、現場で橋梁架設後に地元塗装会社による上塗りとしていたものを、すべて工場塗装とし、添接部及びタッチアップ部のみ橋梁架設会社による現場塗装としました。

また色彩につきましては、塗料メーカーの力を借り、10色ほどの完成予想図を作成していただき、どれがよいか事務所職員全員にアンケート調査を行い、それから紆余曲折を経てインディアンレッド（塗料用標準色番号S43-149 マンセル値7.5R4.5/14 近似）に決定しました。

その後、受・発注者一丸となって工事の最後の追い込みとなり、平成7年3月末、無事開通式を迎え、地元はじめ関係者の皆さんと大いに喜びを分かち合い、感動したことを覚えております。

それから30年ほど経過し、干支大橋ではレベル2地震動への耐震性能を確保するためブレイトラスの改良を行う等、国内でも前例のない構造変更を、供用しながら実施したそうです。（詳細は2022.6.21付橋梁新聞に掲載されております。）また、現在、（一社）日本橋梁・鋼構造物塗装技術協会の九州地区会員であります（株）くちき、森塗装（株）、吉川塗装（株）の3社を含め、地元塗装会社による全面的な再塗装工事が進

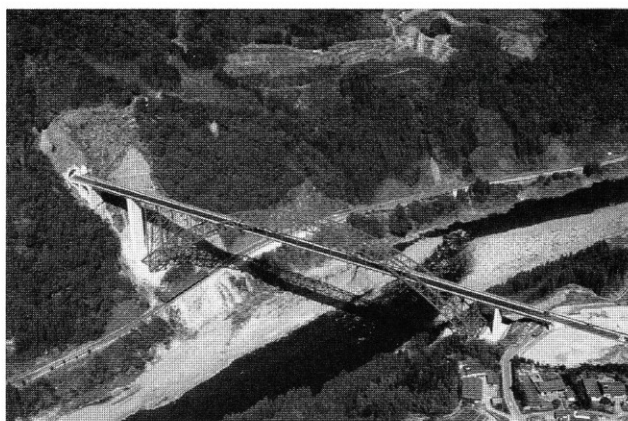


写真-1 干支大橋全景

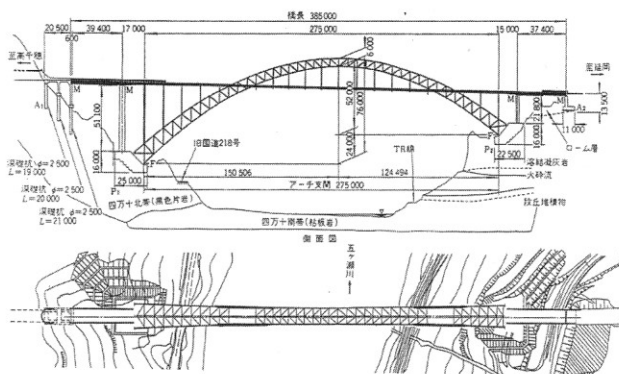


図-1 干支大橋一般図

1) 宮崎「橋の日」実行委員会会長

められており、さらに安全性が増した、周囲の山々の緑とコントラストをなすランドマークにふさわしい鮮やかな「干支大橋」が、早くよみがえることを心待ちにしているところです。

3. 「橋の日」との出会い

椎畑バイパス開通式の1週間後、平成7年4月に私は道路建設課橋梁係に異動となりましたが、社会資本整備の遅れている本県は多くの橋梁事業を進めており、そこで「橋の日」との付き合いが始まりました。

その当時は官民連携、官民協同などの動きが始まったばかりで、行政と民間が一緒になって活動するのは珍しく、私もどのように対応すればいいかわからない状態でした。そのため、既に10年近く活動していた宮崎「橋の日」実行委員会に対して少し距離を置き、会議だけに参加、イベントについては勤務時間と重なるため参加せず、形だけの付き合いとなっておりました。それから23年後に再び「橋の日」の活動に参加するのは夢にも思っておらず、もっと積極的にかかわっておけばよかったと後悔しております。

4. 「橋の日」

「橋の日（8月4日）」は宮崎県延岡市出身の湯浅利彦氏が子供のころの川遊びの思い出や、成人して橋梁工事に携わった経験などから、年を重ねるごとに橋への「熱い思い」と「感謝の気持ち」が芽生え、昭和60年に提唱したものです。

私たちが日ごろ、何気なく利用している橋はどの橋も、費用の工面や工事に携わった人達ははじめ多くの先人たちが苦勞して造り、今に残してくれた、まさに血のにじむような努力と汗の結晶です。そのような橋との触れ合いを通して、橋の役割に思いをはせ、橋に感謝する気持ちを持っていただくことにより、故郷を愛する心を育てたいという思いが「橋の日」提唱の原点で、かけがえのない橋との触れ合う日として、人と人、地

域と地域をつなぎ、様々なイベントを通して、道路・河川の愛護や潤いのあるまちづくりなど、郷土愛を深めることを目的としております。

5. 宮崎「橋の日」実行委員会

「橋の日」活動は、湯浅氏参加のもと、昭和61年に全国に先駆けて延岡市の安賀多橋で初めて実施されました。内容は「延岡の橋、今昔」写真展、早朝清掃、生け花の装飾、郷土芸能保存会による踊り奉納、高欄への風鈴やパラソルの取り付けなど、多彩な祝い行事が行われております。（写真-2）

また、翌昭和62年には、宮崎市の橋橋で第1回宮崎「橋の日」が横山忠夫実行委員長をはじめとする有志メンバーにより実施されました。ラジオ体操、橋橋・大淀川河川敷清掃、橋・河川学習、橋上からの風船上げ、橋に生け花を飾るといった盛りだくさんの内容でした。（写真-3）

この翌年、昭和63年に当時の松形宮崎県知事の声掛けで宮崎「橋の日」実行委員会が設立され、当時10名のメンバーが徐々に増え、現在は約50名となり継続的に様々な活動ができる団体となりました。今では、延岡市が「橋の日」発祥の地、宮崎市が「橋の日」情報発信の地としての役割を担い、毎年多様なイベントを企画、活動が続いているところです。

6. 8月4日「橋の日」イベント

設立当初10年程度は経験のない活動を手探りで進める状態でしたが、平成6年に（一社）日本記念日協会から念願であった8月4日「橋の日」記念日の認定を受け、この頃よりようやく行政や民間企業等に認知され、様々な支援を受けられるようになりました。イベントとしましては、橋への感謝の気持ちを込めた献花や橋みがき、当橋塗協の九州地区会員が加入しておられる宮崎県鋼橋コンクリート構造物塗装協同組合の協力により橋上点字ブロックの清掃を実施しているところ

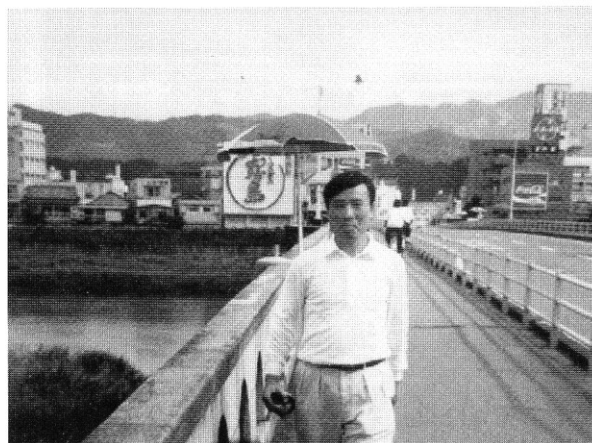


写真-2 昭和61年延岡市安賀多橋での第1回イベント
「橋の日」提唱者の湯浅氏（写真中央）



写真-3 昭和62年宮崎市橋橋での第1回イベント

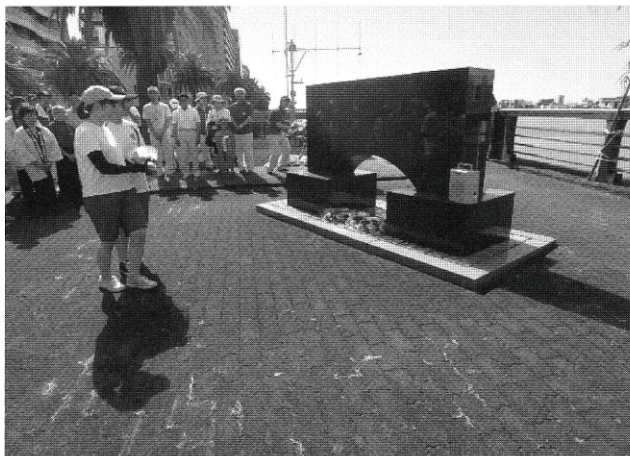


写真-4 献花



写真-5 橋みがき



写真-6 橋の内部見学会

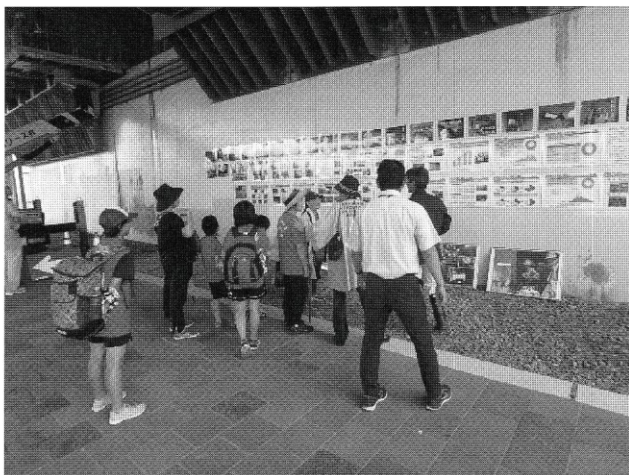


写真-7 道路老朽化パネル展

るです。

また、平成 29 年からは国土交通省九州地方整備局宮崎河川国道事務所の協力により橋の内部見学会と「道路老朽化対策」パネル展を開催しております。これは橋への感謝だけでなく、市民目線で橋を含めた道路施設のメンテナンスに興味を持っていただけるようにとの思いからですが、子供さんだけでなく、大人の皆さんも興味津々で期待以上の効果があると感じております。(写真-4 から写真-7)

7. 「橋の日」広報活動

平成 5 年に「橋の日」活動を全国に広げるため、「橋の日」をイメージしたシンボルマークを制作することとなり、全国公募を行い、305 点の応募の中から 1 点を選定しました。(図-2)

また、提唱者湯浅利彦氏作詞、鹿児島県出身の作曲家斎藤正浩氏作曲による「橋の日」テーマソングも制作し、プロ歌手の大城光恵氏の歌で CD 化、希望者に有償にて配布している。ちなみに私は歌えませんが、2 年前から YouTube 配信しており、6 月 9 日には再生回数が 10,000 回を超えるなど多くの方に聞いていただいております。

そのほか、8 月 4 日の記念イベント用に「橋の日」のぼり旗を制作し、県内外のイベント関連団体等に無償で提供、活用していただいているところです。さらに、当会の会員用としてグッズ（帽子、ポロシャツ、タオルの 3 点セット）を制作、普段から着用することで「橋の日」広報に努めており、体育施設、公園等で「橋の日とは何？」と声をかけられることもあり、一応の効果は出ているようです。(写真-8)

なお、地元紙、全国紙、地元テレビ等のメディアへ情報提供しており、平成 11 年からホームページによる情報発信も行っております。

8. 地域の魅力発信

8.1 橋橋と福島邦成

当委員会では、活動開始 10 年目頃から 8 月 4 日の「橋の日」イベントだけでなく地域に根差した活動を行うようになり、「橋に携わった先人に感謝」という理念から宮崎「橋の日」の舞台となる「橋橋」の歴史を調査したところ、福島邦成氏（私財を投じて初代橋橋を架けた医師、実行委員会会員の福島順一氏は曾孫）の存在を抜きにしては語れないことがわかりました。このため、平成 9 年には記念講演会として「橋橋と福島



図-2 「橋の日」シンボルマーク



写真-8 「橋の日」グッズ



写真-9 紙芝居「橋橋と福島邦成」



写真-10 紙芝居「橋橋と福島邦成」上演会

邦成」を、翌平成 10 年には「橋橋の 100 年展と福島邦成パネル展—彼の生きた江戸・明治時代の日本・宮崎—」を開催しました。さらに、平成 23 年には紙芝居を制作し、現在も宮崎市内で上映会を続けており、YouTube 版紙芝居でも好評を得ております。(写真-9、写真-10)

8.2 橋のポスター

また、平成 13 年には宮崎県内に現存する 94 橋の石橋をまとめたポスター「宮崎の石橋」を 1,000 枚製作、県内全小中学校に配布したところ、テレビ番組で特集

が組まれるなど大きな反響があり、このポスターをきっかけに県内に 389 もの石橋が現存することが明らかになりました。さらに、平成 15 年には宮崎県民から県内の魅力ある橋として、総数 303 橋の応募をいただいた中から 101 橋を選定したポスター「宮崎の橋 101 選」を 2,500 枚製作、県内の高校・大学関係機関等へ配布しました。(写真-11)

なお、平成 23 年には（社）土木学会が平成 17 年に全国調査し、近代土木遺産と定義している県内 32 橋の中から 10 橋を選定し、県内外に掲示、配布すること



写真-11 平成 15 年宮崎の橋 101 選ポスター



写真-12 平成 23 年てげいっちゃんがみやざきの橋ポスター



写真-13 「とんとこ地震」絵本



写真-14 県へ紙芝居・DVDの寄贈

で、宮崎をアピールすると共に、県民が「橋遺産」の価値を見つめなおし、地域活性化への活用のきっかけとするため、ポスター「てげいっちゃん（宮崎弁で、とってもいいですよ）宮崎の橋」を2,000枚製作、道の駅など旅行者の目に触れる場所や広報誌等への掲載などを行いました。（写真-12）

これらのポスターを通して、橋梁はすべての先人の努力と知恵、技術の賜物であることを再認識し、改めて地域を知り、愛するきっかけとなったところですが、製作から10～20年経過しており、新たに架けられたり、また撤去されたりしておりますので、今後新たに橋梁を選定、新しいポスターを制作したいと考えているところです。

8.3 とんとこ地震

宮崎空港から5分程度車で南下した宮崎県総合運動公園の近くに、360年前、宮崎県に大きな地震と津波による甚大な被害をもたらした日向灘大地震（とんとこ地震）を語り継ぐための供養碑があります。寛文2年（1662年）に日向灘を震源とするマグニチュード7.6の大地震が発生し、県内は震度5以上の揺れにみまわれ、高さ4～5mの津波が宮崎県から鹿児島県大隅半島一体に襲来し、当時海の東側に突きだしたところにあった外所（とんとこ）地区が寺とともに一夜のうちに海中に没したといわれております。この碑につきましては、発生後50年ごとに地域住民による供養祭並びに新しい供養碑建立が360年にわたり行われており、これまで7基（1基、2基目は一部破損）が建てられており、今日まで受け継がれております。本県は南海トラフ巨大地震や日向灘沖地震が今後発生するといわれており、私たちはこれらを題材として平成26年に「とんとこ地震」の紙芝居とDVDを制作し、県民の防災意識向上のための取り組みに活用していただくよう県に寄贈しました。また、令和元年には「とんとこ地震」の絵本作成にも着手し、20冊を県に寄贈、さらに令和2年には450冊を増刷、県教育委員会を通じ

て県内全小学校236校に配布していただいたところです。今年度には、「とんとこ地震」の発生した宮崎市の幼稚園、保育園等に寄贈、幼い子供達にも読み聞かせていただく予定です。（写真-13、写真-14）

この「とんとこ地震」につきましては、よく「橋の日」と何の関係があるのと聞かれます。そのたびに「とんとこ地震」とは発生した時代、場所も異なりますが、東日本大震災の河口部から津波が遡上し、いとも簡単に橋梁が破壊され、地域が浸水等により取り残される映像がショックで、住民が安全に避難するためにも橋をより機能的・構造的に強いものとして保全していくことが大事であること、また「とんとこ地震」での50年ごとの記念碑建立は津波災害の恐ろしさを、過去から現在そして未来へとつなぐ精神的な継承、「記憶の架け橋」となり「橋の日」活動の理念に合致しているからと説明しているところです。

8.4 「橋の日」活動の全国発信及び支援

平成18年8月には活動20周年を迎え、全国への発信として「橋の日サミットinみやざき2006」を宮崎市内で開催しました。メインイベントとなるパネルトークでは「橋から見る地域づくりとロマン」をテーマにパネリストとして、ほくりく橋の日実行委員会、東京橋の日実行委員会、奈良県十津川村役場、鹿児島橋の日推進協議会からおいでいただき、思いのたけを熱く語っていただきました。（写真-15）

その後、5年毎に全国発信の活動を行っており、25周年となる平成23年、30周年となる平成28年のそれぞれ8月には「橋を通じた地域づくりシンポジウム」を宮崎市で開催、県外の橋梁等専門家による基調講演や県内外の団体による事例発表等を行いました。なお、35周年となる令和3年につきましてはコロナ禍のため開催をあきらめたところです。（写真-16）

このような記念活動や普段からののぼり旗、パンフレット等の県内外の他団体への無償提供などの全国発信の活動が実を結び、平成27年8月4日の滋賀県「瀬



写真-15 平成18年橋の日サミットinみやざき



写真-16 平成23年橋を通じた地域づくりシンポジウム



写真-17 平成28年「道路環境美化功労表彰」受賞



写真-18 平成30年「明日のみやぎづくり」表彰

田の唐橋」での開催により、全国47都道府県すべてに「橋の日」の輪が拡大、この年には日本記念日協会から「記念日文化功労章」を、また翌平成28年には国土交通行政の円滑な推進の功績が認められ、宮崎河川国道事務所より道路環境美化功労表彰を受賞したところです。なお、平成30年には30年以上の長きにわたる社会貢献活動に対しまして宮崎県知事より「明日のみやぎづくり」表彰を受けることができました。さらに、当実行委員会の副会長を宮崎大学工学教育研究部森田千尋教授に平成30年4月からお願いしているところですが、教授のご尽力により令和2年11月には今までの活動、特に全国発信に対して土木学会後援デミーとマツの土木広報大賞2020優秀賞3位「イベント部門」を受賞することができました。(写真-17、写真-18)

土木学会に関しましては、これも森田教授のご尽力により「とんとん地震」の絵本を土木学会に寄贈し、全国へ情報発信(土木学会各支部等への配布)していただくこととなり、令和3年12月、土木学会本部に赴き谷口博昭会長へ無事お渡しすることができました。その後の谷口会長はじめ、塚田専務理事との意見交換の場で土木学会との「インフラパートナーシップ」の話となり、とんとん拍子に話が進み令和4年3月に「インフラパートナーシップ合意書」を締結することがで



写真-19 令和3年土木学会へ絵本贈呈

きました。インフラパートナーシップは、土木学会と当実行委員会が連携することにより地域インフラの質的向上を図り、その活動を楽しみ、推進することを目的にしており、活動の広報、情報交換を連携するものです。宮崎県では当委員会が初めての団体であり、今後、他団体の活動を調査研究し、新たな情報発信等に取り組んでいきたいと考えているところです。(写真-19)

9. 終わりに

以上、宮崎「橋の日」の活動等について紹介してきました。活動を始めてから8月4日は幸いなことに、イベント時間の1～2時間だけは大きな天気の流れもなく、第24回の口蹄疫対応、第34、35回のコロナ禍の3回のみ、内容、規模等を縮小し、それ以外は、例年宮崎学園の生徒はじめ、老若男女の皆さん250人規模で行ってまいりました。

今年の第36回宮崎「橋の日」は3年ぶりに献花、橋みがき等をコロナ禍以前の規模で実施する予定でした

が、7月の感染者数増加に伴い残念ながら中止となりました。私たちは、これからも地域と地域、人と人、また過去・現在・未来をつなぐ橋梁を大事にする心を大切に「楽しみ」ながら「橋の日」活動を行っていきたいと考えております。また、8月4日の橋の日記念日の活動の輪が、本県のみならず、全国各地に今まで以上に広がっていくことを願っております。

本執筆にあたり、多くの写真を提供して頂いた宮崎「橋の日」実行委員会事務局長の鶴羽浩さまに厚く御礼申し上げます。